

島根日日新聞へ「出雲流庭園」研究レポートの寄稿

島根日日新聞の記者より、今年の研究発表会で「出雲流庭園」について興味を持ち、研究分科会のメンバーのレポートを掲載させてほしいとの依頼があり、今年の5月の10連休に「出雲流庭園の魅力」の題目で連載されました。掲載されたのは、下記のとおり林、原、武田技術士の3名のレポート10編です。

- 1 出雲流庭園と呼んでよい庭
 - 2 時代背景からみた出雲流庭園とその未来
 - 3 出雲流庭園と匠の技
 - 4 出雲流庭園の石材 Q & A
 - 5 出雲流庭園の不思議「古唐形濡鷺形石灯籠
 - 6 出雲流庭園に花は不要か？
 - 7 「本陣庭園」と「出雲流庭園」
 - 8 島根の名庭めぐり
 - 9 出雲流庭園を救えーイエローブック出雲流庭園ー
- これに、「連載にあたって」をつけて10日間分です。

「出雲流庭園」の概要や成り立ち、特徴等からはじめ、今も多くの個人庭園が残っており、今後も残すべき遺産であるということを伝えたいという連載の主旨をお聞きし、協力しました。

出雲流庭園の魅力

(1)

島根県技術士会

庭園文化研究分科会

武田隆司

出雲平野に降り立ち、出雲大社に向かう県道の車窓に広がる出雲平野の風景は、観光客の目にとどまらざるを得ないのであろうか。

広大な田園の中に、屋敷林「築地松」を備えた民家が散在するその景観は、富山県の砺波平野や岩手県の胆沢扇状地などと並び、日本を代表する伝統的な景観だ。

民家の敷地は驚くほど定形化され、北西を高さ10mほどの築地松で囲み、敷地の南側に門を設け、その奥に「出雲屋敷」と呼ばれる和風建築を配置する。そして、敷地の南西部には、やはり判で押し切ったように同じデザインの庭が作られている。

そうした出雲流庭園を持つ屋敷の数は、道路から見えるものだけでも300は超える。この庭のことを聞きつけて、40年前に東京から2人の若手造園家が訪れ、調査

「出雲流庭園の魅力」連載に当たって



出雲文化伝承館豪農屋敷庭園



原鹿の豪農屋敷

を始めた。その著書「出雲流庭園―歴史と活形―」の中で初めて「出雲流庭園」が登場する。

この地方でも「出雲流庭園」という言葉を知る人は、決して多くはないだろう。流派や作庭の手引き書があるわけでもないし、地元の名造園家の中にはこの名前を認めない人もいる。また、成り立ちや形態についての謎の部分も多い。しかし、確かにおびただしい数の定形化した庭が存在し、その様式はこの地域独特のものなのである。

出雲流庭園のルーツは、江戸末

期の松平治郷(号・不昧1751〜1818年)にさかのぼる。大名茶人として名を上げた不昧は、江戸大崎の下屋敷に11もの茶室を備えた大庭園を築造したとされる。沢舟といってお抱えの庭師を、江戸から連れ帰り作庭した菅田庵(松江市)が発祥とされるが、玄丹が実在の人物かどうかははっきりしない。

明治、大正、昭和にかけて富裕層により発達し、次第に庶民に広

まっていた「出雲流庭園」。特に出雲平野を中心に定形化が進んだとされる。池を設けない枯山水様式で、敷き詰められた白砂に多彩な飛び石で構成される独特な造形。そして、灯ろうやつくばい等の茶庭の要素を持つことが特徴とされる。

地域特有の様式の庭がこれほど集中して残っている地域は全国的にも珍しく、文化庁も庭園群として保護していく視点が重要としているが、ほとんどが個人の庭であり、維持管理の負担やライフスタイルの変化により減少の一途をたどっている。

出雲平野の風景は、築地松だけではなく民家の屋敷構えと庭園があっというものである。

島根県技術士会は、様々な科学技術分野の技術者330余名からなる団体である。当会の研究分科会では県内の地域資源を掘り起こし、光を当てていく研究活動を行っている。「出雲流庭園」も、この地方ならではの文化遺産であり、観光資源としても期待される。我々の活動が、庭の魅力、価値への理解を高め、保全と活用につながればと思う。

出雲流庭園の魅力

〈2〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 武田隆司

「出雲流庭園」の定義は様々であるが、これまで1984年に発行された元となった「出雲流庭園の歴史と造形」では、松平木味公の茶道の影響を受け、明治以降確立され豪農や豪商を中心に広まった平庭式の枯山水の庭、典型的なものとしては、出雲市斐川町の江角栄氏(原鹿)庭園などであり、飛石に特徴がある庭」と定義されている。しかしこの著書では、典型的な出雲流庭園は一部の庭園であり、その他は「出雲流技法の見られる庭園」としている。地元在住の名工と呼ばれる造園家によると「出雲流庭園」という確立された流派はない。むしろ出雲風庭園と呼ぶべきである」とのことであるが、すでに「出雲流庭園を自称している庭もいくつか見られる。それでは我々が「出雲流庭園」

出雲流庭園と呼んでよい庭

と呼び、地域の観光資源として紹介してもよいのはどのような庭なのか。本会が2009年から視察してきた23庭園について作庭技法を検証し、整理してみたいと思う。

■出雲流庭園の特徴

本会では、前述書籍に示されている出雲流庭園の特徴を7つの指標に分類し、具体的な44技法に該当するかどうかを現地確認した。指標と技法は以下の通りである。

- ①「庭の配置」(建物の南西部・アプローチなど)、②「基本構造」(平庭・枯山水・L字型・庭の境界など)、③「茶道の要素」(茶室・つくばい・袖垣の有無など)④「飛石の特徴」(高さ・配置・敷き砂・短冊石や石臼などの加工石の使用)



松江歴史館庭園

- など)、⑤「石組・灯ろう」(簡素な石組・丁字形石組・来待石灯ろう・兜形灯ろうなど)、⑥「庭木の配置」(樹木少ない・常緑樹多用・雲竜仕立てのクロマツなど)、⑦「建物周りの特徴」(床の高さ・犬走の形態、中門廻り手法など)。

■調査結果

該当率80%以上は、江角昇氏庭

園(出雲文化伝承館)と江角栄氏庭園(原鹿の豪農屋敷)、松江歴史館の3庭園である。両江角氏庭園は、前述の書籍でも斐川地方の豪農庭園の典型と紹介されている。この2庭園はともに平庭になり移築復元されたが、建物や庭の配置も含めて忠実に復元されている。松江歴史館の庭は、平成に作庭された新しい庭で、建物の形状や庭の配置は違うものの、飛石の技法や茶道の要素等の特徴を忠実に採用している。これらは出雲流庭園として紹介してもよいと思われる。

該当率60%以上の8庭園は、出雲流庭園と呼ぶことがふさわしいかどうか迷ったところであるが、出雲流庭園のバリエーションと考えられないだろうか。石橋遺構、本陣の庭は商家の庭タイプで、敷地の制約により庭の方位や形は様々であるが、基本構造や飛石等は出雲流の技法を取り入れている。一畑寺、康國寺、普門院は寺院の庭タイプで、江戸期以前に作られた庭に出雲流庭園の技法が加えられたものである。また藤原家と櫻井家の庭も立体的な池泉庭園に明治以降建物周辺に出雲流の技法が加えられた奥出雲タイプに分類できるのではないかと。その他、該当率40%以上の願樂寺、蓮葉院と古門堂、佐草氏、旧上蔵氏、櫻洲寺本坊の5庭園は「出雲流庭園の技法が見られる庭」であり、該当率10%の多門院、垂光寺、万寿寺、城安寺、雲樹寺、北島氏の6庭園は出雲流庭園ではないことがわかる。

出雲流庭園には流派も手引き書もない。今後所有者や管理者の趣向の変化や建物の更新などにより、庭も変わっていくかもしれない。この地方にしかない伝統技術をせひ残していきたいものである。

出雲流庭園の魅力

〈3〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会

原 裕 二

私は出雲流庭園を「武家や寺院の影響が少ない」と「池泉がない」と定義することにしました。今回は、この2点について、主に時代の移り変わりから述べる。

■士農工商と出雲流庭園

江戸時代、築庭は限られた高貴な身分にしか許されず、一般には無縁のものであった。しかし藩主が宿泊する御本陣（本陣家や平田本陣、織原家、櫻井家などの豪農・豪商屋敷）では、特別にわずかの築庭が許されたようである。

藩主の宿泊が終わった後は、「跡見」といって、座敷飾りやおもてなしの様子をそのままの状態でご覧した。一般庶民がお殿様の日常に触られる唯一の機会であった。

明治になって身分制度が廃止に

時代背景からみた出雲流庭園とその未来



臨濟宗妙心寺派の寺院で見られる「代表的な出雲流庭園（上）」と「池泉式庭園」



■池泉がある理由

庭になぜ池泉があるのかという疑問がある。

桂離宮のガイドブックによると、「当時流行していた舟遊び（明から伝えられた煎茶の遊興の一つで、池の周囲に茶店などを設け、舟で巡る）の影響がみられる」とされている。池泉のある庭は中国から伝来し、最初に貴人の邸宅などに建設された。池泉とはそのような貴族趣味を反映した、あるいは

は模倣したものらしい。

一方、寺院にも良い庭が存在する。臨濟宗は枯山水で有名だが、表庭は白砂と石が主体でも、裏の私的な空間は見事な池泉式の庭を備えている（たとえば、萬寿寺、龍雲寺、玉照寺など）。これは、宗教上の理由なのか、歴史的背景があるのか、他に理由があるのかは今後の検討課題である。

■出雲流庭園の未来

庭園は、主として樹木と石で

できている。古い時代に造られたと言っても、庭木がその当時のままで残っているのはまれである。庭は何回か改修され、その当時の時代背景や流行、好み、所有者の財力や思い入れなどに大きく左右される。

たとえば、臨濟宗雲門寺は現在、枯山水でありつつじて有名である。しかし池の跡があつて先々代の頃

はもっと異なった趣であつたと聞

く。桂離宮は、江戸時代初期の作庭だがいったん荒廃し、1976から91年にかけて大々的に修復されている。当時の様子を忠実に再現したとはいえ、実際に我々が見るのは現代の桂離宮である。

このように、時代背景の変遷を考えた場合、庭を造るだけではなく、維持管理して行くためには、出雲流庭園を子孫に残したい、金をかけて庭をきれいにしたい（自慢したい）、という強烈な意志が必要となる。しかし現代では、家を建てる時、〇〇ハウスや××工務店で建築し、昔ながらの日本家屋とすることはまれになった。まして、「庭付きの家が欲しい」というときは、日本庭園ではなく、芝生の庭を指すのがほとんどである。

こういつた中で今後、出雲流庭園が滅びゆく過去の遺産として伝承の中に消えていくのか、一部の数寄者の愛好品として細々と残るかは不明である。しかし、私としては、発展的に形を変えながら後世に伝えるべき遺産だと確信している。庭園文化を伝えていくためにどうしたらいいか、今後とも模索していきたい。

出雲流庭園の魅力

(4)

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 林 秀樹

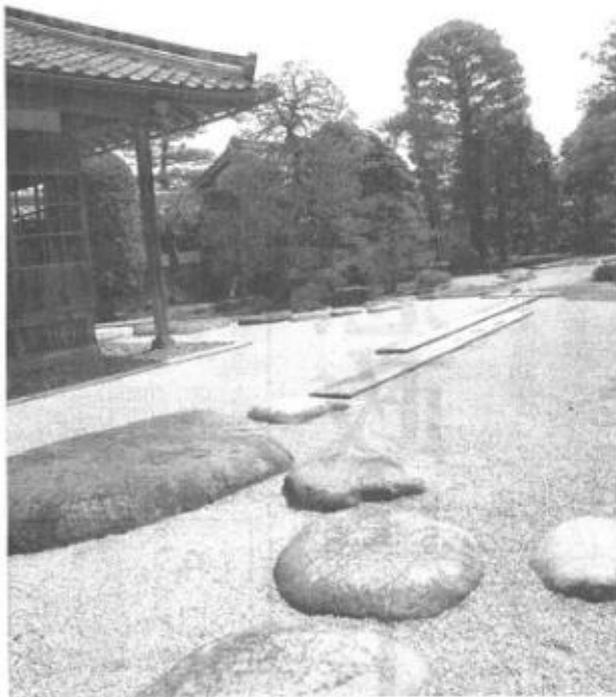
「技術士の研究会で日本庭園を見学しているなんて、趣味の世界だな」という意見を耳にした。私からの反論は「出雲流庭園を学ぶ」とは、現代の建設系設計技術者に不足しているマニュアルによらない設計手法、地域特性を生かす技術やコストと機能を包含したデザイン力を学ぶ最適な場である」だ。

■出雲流庭園のルーツ

江戸時代中期以降、経済力を強めた全国の豪農・豪商は次々と邸宅を構え、それにあわせるかのようになつた。彼らの多くは、見た目の豪華さだけでなく、京都などで完成した設計マニュアルを順守したといわれている。例えば、鳥取県羽合町にある豪農屋敷「尾崎

出雲流庭園と匠の技

家庭園」には、池には亀石、対岸には三尊石組と枯滝があるなど、江戸時代の作庭書「築山庭造伝」に基づき作庭築造されているといふ。こうした作庭書には、亀石・



出雲文化伝承館の飛石

鶴石など定型的な石組、陰陽五行説による庭園思想などの伝統的な作庭技術が絵図とともに記載されている。ところが出雲流庭園は、京都の庭師の作庭書を虎の巻として築造されず、同じころの他の地方の庭園とは大きく異なる独自のデザインで作庭されている。出雲地方にだけ京都の作庭書が届かなかったことは到底考えられない。出雲の庭師たちは、作庭書は参考にしながらもそれにこだわらず、出雲地方の風土、歴史、経済といった諸々の外部的要因をつまき調整

■出雲流庭園の機能美

私は、県立農林大学校で、造園の講義と実習を担当しているが、出雲流庭園の見学実習の時に「客間に正座して庭を眺めた後、飛石を使って庭園内を歩くとドラマチックに庭の表情が変わる」と指摘する学生がいるし、飛石、短冊石がとても歩きやすく配置されていることにも驚嘆する。

他の地方の庭園では脇役である飛石は、出雲流庭園では主役であり、「散策して眺める」機能を実現するためのものである。飛石を据えるにあたって千利休は「渡り(歩きやすさ) 6分、景気(見た目の美しさ) 4分」としたが、古田織部は「渡り4分、景気6分」とすべきであると述べている。また作庭書では飛石を据える場合、地面よりわずかに高く打つと最も品が良く、美しいとされている。

宍道町の八雲本陣や、斐川町の豪農であった江角庭園を出雲市文化伝承館に移設した同館庭園の場合、短冊石と飛石がその存在を主張するかのようになつて見えられている。高さも、目立って高く10センチくらい地面から飛び出て据えられている。飛石の間隔も狭い。雪が降った日に、着物を着て庭に出て雪景色を楽しむことができるように設計されたものであつた。出雲流庭園は、「渡り8分、景気2分」で設計されている。滝組の石より飛石が際立っている。出雲の庭師たちは、実用性を重んじて、飛石を庭園の主体構成物として位置づけ、飛石のデザインに力を注いだと思わずにいられない。

出雲流庭園の魅力

〈5〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 原 裕二

庭園文化研究分科会が過去に開いた講座での質問は、「この石なにどこから持ってきたの?」が最も多く、「どのようにして運んだの?」も多く寄せられた。そこで今回は、答えられたことや、うまく答えられなかった内容をとりまとめ、出雲流庭園と石材の関係について考察する。出雲流庭園に見られる石材は花崗岩類が圧倒的に多い。出雲地方において花崗岩類は雲南、奥出雲、松江市南部、安来市の山間部で見られ、花崗閃緑岩と花崗岩に分けられる。石材の岩石名が分かれば、その産地はおおよそ見当がつく。

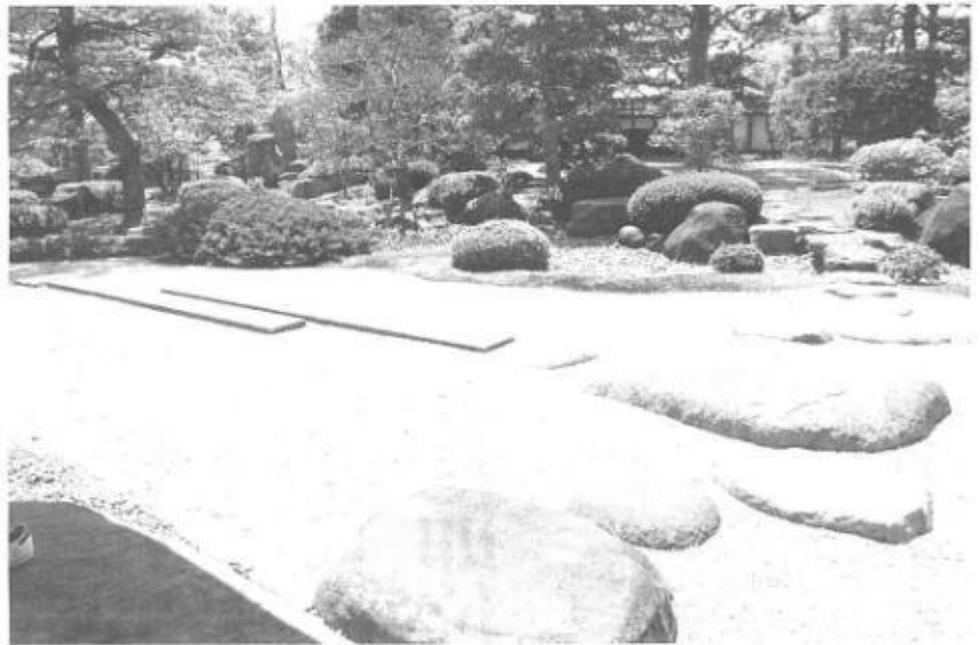
■大東花崗閃緑岩
白っぽい岩肌である。均質な真砂にはならず玉石状の硬質部分を残すことが特徴である。

出雲流庭園の石材 Q & A

雲南市内の三刀屋川沿いでは、石切り場が数カ所あり、かつては「三刀屋石」として出荷していた。灯籠や短冊石、沓脱石などの装飾用は新鮮な露頭で採取し、細かい細工を要しない庭石や石垣、石段などは各地の石切り場から集めて利用したと考えられる。

■鴨花崗岩・横田花崗岩

花崗岩は深層まで真砂状となっている。黒雲母やアルカリ長石が粘土鉱物に変化したり、鉄分の酸化が進んだりして全体にやや赤っぽい。均質に風化が進行するため、表層に玉石や未風化核岩は、あまり見られない。よって、加工用として使える石材を得ることは難しく、主に庭石や山灯籠などの自然石として利用される。まれに花崗岩の見事な灯籠を目にする



出雲文化伝承館の短冊石・踏み分け石

が、その場合は広島県尾道周辺からの輸入品である可能性が高い。たとえば、横田花崗岩が分布する地域にある藤原家や櫻井家の庭園では、沓脱石や短冊石、石垣などの加工品には大東花崗閃緑岩を使

い、飛石や庭石は横田花崗岩の川石を用いている。なお、花崗岩が風化した赤褐色の敷砂は、かつて大変貴重なものとして大切に使用された。

■島石

出雲文化伝承館や一般の出雲流庭園では、島石を頻繁に見かける。講座のなかでも「これはうちにもあるけど」という質問が数人から寄せられた。島石の特徴は▽大根島、江島に分布する大根島玄武岩▽多孔質で耐久性に富む▽硬質だが加工がしやすい▽光沢に乏しく派手でない▽苔が付きやすい▽灯籠、庭石、基礎石、石垣、石段などに使われる▽船によって運搬され、宍道湖、中海周辺でよく使われる▽の特徴がある。

■どのようにして運んだのか

前述の三刀屋町石切り場には、三刀屋川の中に船着き場があったと思われる露岩が残されている。斐川町の江角家(現出雲文化伝承館)までは、雲南の米や鉄、炭、木材などと同様に、三刀屋川から斐伊川を利用して運搬されたようである。斐川町に入ってから、新川開削前であれば、出西石樋を通過して高瀬川で、開削後なら南高瀬川あるいは北高瀬川で下流に至ることができる。

出雲流庭園の魅力

〈6〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 林 秀樹

その二つの灯籠について述べる。

■古唐形石灯籠

一般的に庭は、美しさや豪華さなどを誇示するものであるが、出雲流庭園は違つ。生活用具や民具のように機能を重視し、庭の配置やデザインが同じなのである。これまでの調査では、社寺や商人、武家屋敷の庭園に、典型的な出雲流庭園は見当たらない。私は、出雲流庭園は、農民の庭ではないかと考えている。出雲流庭園の分布は限られており、主に旧出雲市と旧斐川町、旧平田市に点在する。松江市内には、出雲流庭園風にデザインされた庭を散見することができるが、短冊石や石灯籠の配置などの形式が違つことも多く、クロマツの剪定方法も電車型に立てにこだわらず様々である。但し、出雲地方の庭では、庭に据えられている石灯籠に出雲地方特有の共通点がある。それが、古唐形石灯籠と濡鷲形灯籠である。今回は、

出雲流庭園の不思議「古唐形と濡鷲形石灯籠」

出雲地方特有の灯籠である。他の地方では見られない。古唐形石灯籠が、他の石灯籠と違つところは、一カ所。中台に、水を溜める仕掛けがあることである。火袋に近い部分がくりぬいてあり、要所に排水用の穴が開けてある。排水口を塞いで、水を溜め、火袋に蠟燭を灯すと、透かし形の火袋から全方向に火が輝き、中台の水に反射する光が周囲を明るくする。

にどかっと据えられている。

■濡鷲形灯籠

現代の濡鷲形灯籠は、火袋に蠟の姿が彫り込まれている。しかし、本来は、六面ある火袋の二面に濡と鷲の漢字が彫り込まれているものをいう。これまでの調査でこの灯籠は、神社や寺院にも設置されていない灯籠である。鷲は、夏に

は田んぼで餌をついばむ姿とよく目にする。古事記の国譲りの神話でアマテラスの命令に従わず出雲で死んだ天若日子(あめのわかひこ)の葬儀の場面に出てくるし、七夕にも深いかかわりを持つ鳥である。

中国では、織姫と牽牛が天の川を渡り出会うために、カササギという鳥が羽を広げて橋を造るときにカササギは、17世紀に



康國寺庭園にある古唐形灯籠

■まとめ

私は、立春の方位に配置される古唐形石灯籠は、陰が一日でも早く開け、日がさんさんと照り作物が大きく成長することを祈った灯籠であり、立秋、七夕の方位に配置される濡鷲形灯籠は、織姫と牽牛が無事に出会い、作物の豊作と収穫した生糸や綿糸で良い織物ができることを祈る灯籠ではないかと考えている。

出雲の庭づくりにこのような秘密が隠されていると考えると、庭の楽しみ方も広がるのではないかと思います。

出雲流庭園の魅力

〈7〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 武田隆司

2018年に「出雲文化伝承館」からの依頼で開催した「出雲流庭園文化講座」の折り、出雲流庭園を持つ方から「庭師さんから出雲流庭園ではサツキに花を咲かせてはいけない。花期の前に剪定すべきと言われたが本当か？」と、尋ねられた。ちよつと返答に困った。

■樹種の傾向

「出雲流庭園は、茶庭である」といつと違和感を持つ人もいるようである。茶庭といえば、表門から飛び石を通って、中門、待合を経て小さな庵の茶室のじりり口を入っていく間の比較的閉鎖的な「露地」（＝草庵式茶庭）を想像する人が多いだろう。そうした庭は、精神を乱すような色彩や強い香りを控え、四季の移ろいや人生の悲哀を強く意識させてしまつ落

「出雲流庭園に花は不要か？」

葉樹も敬遠する。

もともと植栽のなかった茶庭に千利休の後期ころから少しずつ樹木を植えるようになったが、マツ、カシ等は可、落葉樹は嫌ったとされる。古田織部の頃になるとシユロ、ソテツも植えるようになったが、大きな花が咲くものは不可だった。弟子の小堀遠州は、比較的樹種にこだわらなかつたが、茶席の花と庭の花の重複は不可とした。茶道関連書物によると、マキやヒバ等の葉の小さな針葉樹は落ち葉の掃除がしにくいことから敬遠され、ヒイラギモクセイのように棘のある樹木も敬遠されるようである。

これに対し出雲流では、クロマツ、サツキがほとんどの庭で使われる。クロマツは庭の主役として使われ、サツキは、庭の各所に円形に刈り込まれた「玉物」として



出雲流庭園の主役のクロマツ（出雲文化伝承館）

出雲流にクロマツの「雲竜仕立て」がある。一般的に「雲竜」は、「雲に乗って飛翔するさま」とされ、枝が曲がりくねって下垂していることが名前の由来だという。出雲流では、主幹は直立し、主要な枝をくねくねと複雑に曲げ、その先端を枝垂れさせていく。全体の姿は、やや円錐に近いものもあれば、卵型に近いものもある。さらに「反り」の造形も特徴と言える。庭の北西部を囲む築地松や南側の生け垣は端部に向かって緩やかに反るように、また根元から頂部に向かって反るよう

■まとめ

出雲流庭園は、比較的気楽に茶を飲む書院式の茶庭である。葉に茶を染しむ書院式茶庭であり、鑑賞も大きな要素である。じめじめとした山陰の風土の中、「深山幽谷の山道」を演出するのでなく、書院から明るくすっきりとした季節感のある眺めを、この地方の人々はよしとしたのではないだろうか。ぜひ花も楽しみたいものである。

■仕立て方

出雲文化伝承館には、豪農屋敷

風となっている。

出雲流庭園の魅力

〔8〕

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 武田隆司

我々は、出雲流庭園視察の中で「本陣庭園」という言葉を、何回か聞いた。二つは同一のものなのか、違うのか。本陣は、松江藩主が領内を不定期に巡察する際に利用した宿舎であり、宍道湖の北回りと南回りのコースを1〜2週間、総勢60〜70人で巡察したようである。主要街道沿いの大型民家が本陣となり、相当な財力が必要だったと想像される。到着の際に藩主は、御成門から駕籠の主ま庭に入り、庭から書院造りの客座敷に上がっていたとされる。こうした本陣の庭を舞台に茶道による文化交流が行われ、出雲流庭園を生み出したのではないかと推測される。

■本陣庭園の手法

・茶道の要素・出雲地方では、

「本陣庭園」と「出雲流庭園」

本陣の庭に本格的に茶道の要素（飛石や灯籠、くばいなど）が導入されたのは、茶道に造詣の深い松平不昧が巡察をはじめた江戸後期だと思われる。その頃には豪農や豪商が台頭し、藩主を茶の湯で接待していたのであろう。出雲流庭園でも、茶道の要素は必須である。

・御成門：御成門は藩主のみが使用するものであり、築造するには藩の許可が必要であったとされる。贅を尽くしたものが多く、その家の格式を現している。御成門からは、庭の初の景色が見え、出雲流庭園の中門からの期待感を高める庭の見せ方である「額縁技法」も、ここから発生したのかもかもしれない。

・飛石類の役割：庭中央部の一段と大きな石は、「駕籠置き石」と呼ばれ、殿様はここで駕籠を



平田本陣記念館の庭園

降りたとされる。「駕籠置き石の近くには石臼の飛び石があるのは、槍を立てておく石として使ったかららしい」との話もあり、本陣庭園の飛石と一般的な茶庭での違いは、このようなことから生じていると思われる。

・灯籠とくばい：「灯ろうやつくばいを庭の中央に置くのはこの地方の庭独特のものである」という話もある。これも殿様が御成の際、駕籠を降りて、近くのくばいで手を洗いその後に客殿に上がられたことによるものかもしれない。夕方に到着された場合は、庭に灯りも必要であったであろう。

■江戸

江戸後期に松江藩の農業振興の藩政により大地主制が進んだことで豪農が出現。奥出雲地方では、田部氏などのようにたたら製鉄による豪商が出現した。江戸末期にかけて藩との交流が盛んとなり、巡察の際の本陣として藩主をもてなす場として庭園が作られ、不昧の影響で茶道の要素が色濃く出てくるようになった。このことが、出雲流庭園が松江藩内のみに分布する大きな理由でもあるだろう。

本陣庭園の様式をベースに、出雲地方の風土などが加わり、明治以降、一般庶民にも庭園が広がり、現在の出雲文化伝承館（江角家）のような様式になっていったのである。本陣庭園は、出雲流庭園の原形であり、庶民に広がる中で、修景を重視するともに庶民にも整備可能な様式に落ち着いたといったものと思われる。

出雲流庭園の魅力

〔9〕

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 原 裕二

これまで庭園文化研究分科会は、見事な庭を堪能してきた一方で、かなり残念に思った庭や失望した庭も見えてきている。足立美術館や由志園など一部の成功例は除き、多くの日本庭園はその維持管理に苦慮していると聞く。建築や生活様式の変化のため、一般民家の庭では存続さえ危ぶまれている。そこで今回、今まで見てきた県内の庭園で、もったいない庭、これはすこいと思っただ庭を取り上げる。

■非公開の庭

分科会はこれまで、会員の個人的つながりや所有者の厚意で、非公開の庭でも鑑賞できる機会があった中で、最も残念な庭は見ることができない庭である。非公開ゆえに固有名詞を挙げることは

きたらと願っている。

■建築や風土と一体になった庭

津和野町には、重要伝統的建造物群保存地区の中に、文化庁の登録有形文化財となった建物がある。築庭された庭園は登録記念物となっている。これらの庭は町屋の中庭という位置づけだが、その魅力は建物と一体となった空間演出にある。そして周辺の山々や町並みをつまぐ借景として取り込んでおり、津和野の風土と一体となった庭である。

■生き生きとした庭

庭は、やはり母屋の座敷や書院、あるいは四阿(あずまや)、待合などから鑑賞すべきである。できれば飛び石を伝って散策ができるとなおよい。津和野の例は、本来のあるべき姿を現している。日本庭園の維持・保全は、それにふさわしい日本家屋や生活様式の継承を意味し、日本建築様式の維持というハード面だけでなく、私たちの意識改革も求められている。

一方で出雲流庭園でも建物や周辺環境とうまく溶け合った庭が多い。出雲市平田町木綿街道にある本石橋家と旧石橋酒造の庭は、町屋における典型的な出雲流庭園である。こちんまりとした行まいだが、家屋と調和し、好感の持てる

庭といえる。私が最も好きな庭の一つである。庭石のいわれがおもしろい。

出雲市小境町一畑薬師は、寺や教団の行事、御祈念、供養、茶会、マラソン大会と様々な形で人々の心のよりどころとなってきた。一畑寺は本坊書院の雄大な庭園と襖絵、建築が有名である。遠く宍道湖周辺の山々を借景とし、出雲流庭園と露地風の茶庭、書院が一体となった見事な庭である。団体での事前予約が必要である。秋に行われる

一畑薬師茶会に出席すれば、書院からの眺めを堪能することができる。このほか、出雲文化伝承館、鉄師頭取の庭(絲原家、櫻井家)など校舎に暇がない。これらの庭はいずれも、ここで営まれる人々の生活や思いが色濃く反映されたものである。生活に根ざした現役の庭は生き生きとしており、個性溢れる趣を持つている。現代の生活では、庭はとかく手間と金がかかるものとして敬遠されがちである。今後はそのような課題に向き合いながら、この大事な遺産を後世に伝えていきたい。

島根の名庭めぐり



木綿街道本石橋家の出雲流庭園



一畑薬師本坊書院の雄大な庭園

出雲流庭園の魅力

〈10・完〉

島根県技術士会 庭園文化研究分科会 林 秀樹

■出雲流庭園の危機

出雲の庭園は、個人所有のものが多く、豪農や豪商が、競って出雲流庭園を作庭し、庭師たちはその腕を奮った。近隣の農民や商人たちの規模は小さいながら、それぞれの家の表座敷の前に出雲の風土にあった庭園を造っていった。寺院の庭園も京都の大きな寺院のよまつに広く豪華なものほとんどないが、小さいながら趣向の凝った庭園となっている。個人の庭で「出雲流庭園―歴史と透形―」で出雲流庭園の名園として紹介されているところでも、調査に訪れると樹木の剪定がおろそかになっていたり、壊れている箇所が見受けられた。「今、竹垣をなおせば」今からツツジを剪定すれば、また美しい庭が復活できる」と、思われ

出雲流庭園を救え―イエローブック出雲流庭園―

るところも少なくなかった。

かつて、名物料理をたず割烹旅館として有名だった志道町の八雲本陣庭園は現在、旅館は廃業され展示館となっている。客間など庭の数も多く、多種多様な樹木も植えられており、選定などの維持管理費も莫大なものと思いつと、管理を続けておられる当主には頭が下がる思いである。

■イエローブック

イギリスでは毎年3月に、黄色い表紙の庭園紹介の本が出版され、表紙の色から「イエローブック」と通称されている。例年、ベストセラーになるといふ。庭園を楽しむ人々は、このイエローブックを参考に季節季節のオープンガーデンを訪れ、庭園でお茶を楽しむ、オーナーも小物の販売で



八雲本陣記念館

収入を得、さらに美しいガーデンづくりをしているといふ。

国内では、岡山県に「イエローブック岡山」というグループがあり、200以上の庭園が参加している。インターネットで検索すると、このようなオープンガーデンの活動に市が支援を始めてい

ことも見られるなど、徐々に市民権を得ているように思われる。

この活動が、庭のオーナーの満足度を高め、よりよい庭の維持ができるなら、緑豊かな地域環境の保全にもおおいに貢献できるのではないだろうか。

■出雲流庭園をオープンガーデンに

我々の現地視察では、多くの庭

の持ち主の大歓迎を受けた。見学に先立ち掃除されたのであろう。草も抜いてあり、庭を見る表座敷もきれいに片付けられていた。椅子を並べ、茶菓子まで用意していただいた家もあった。「ツツジの花がきれいなときにもう一度いらっしやい」とか「紅葉がきれいですよ」と、楽しそうに話しておられた。案内をお願いした庭師の皆さんも、喜びにあふれた解説をしていただき、作庭時の苦労や庭木の剪定の面白さを説明された。

出雲流庭園を一生懸命に維持管理しておられるのは、個人の庭でも寺院庭園でも高齢者の皆さんであった。次の世代が引き継いで行かなければ、出雲流庭園は消滅していくだろう。密接なかわりをもち、築地松も同じである。

庭園が一番美しいときだけ、オープンガーデンにして、観覧者から庭園管理のための寄付をいただけられないだろうか。庭師さんの解説があればもっと面白い。

出雲流庭園のイエローブックを編集して、参加者を募り、多くの観覧者が出雲流庭園の魅力を満喫できる方策を考えたいものだ。